

◆ 立教大学異文化コミュニケーション研究科 2014 年度第 1 回公開講演会 (2014 年 5 月 31 日) ◆

# データとは何か?

Not Method, but Methodology

箕浦康子

Yasuko MINOURA

ただ今ご紹介にあずかりました箕浦と申します。今回はじっさいに皆さんに課題をやっていたいで、それをもとにいろいろと議論していくというやり方をしますので、講演としては非常に型破りなものになるかと思えます。修士論文を書くとか博士論文を書くということになると、どこかでデータを採ることが必要です。本日は、院生としてこれから研究をしていくという人向けに、「データとは何か?」ということをお話できればと思っております。

データ採集の方法は、通例ではメソッド (method) といい、雑誌論文では、研究方法のセクションにどのような人たち (研究参加者) から、どうやってデータを集めたか (method) が記述されます。今日は、このような具体的な手順を意味するメソッドではなくて、研究という営為の基底にあるふだんは語られない暗黙のモノの見方、メソドロロジー (Methodology) について考えてみたいと思います。どうして method ではなく methodology なのかということ、講演を聞いてわかっていただけるようにお話できればと思います。

## 1. データは再構成された現実である

研究論文を作成する際には、まず、「データを採る」ということがあります。そしてそのデータを分析し解釈して、論文を書くという手順になるわけです。人文・社会科学では、データはなんらかの社会的現実から採ってくるわけです。しかしながら、人びとが生きている社会的現実そのものを直接把握することはできなくて、ビデオに収めるとか、その場で人びとの言動の記録をとる (フィールドワーク) とか、そこの人たちから話を聞く (面接) とか、質問紙に回答してもらうとか、なんらかの方法で言語化 (時には映像化) する必要があります。こうしてデータ化したものと人びとが生きている現実には必然的にズレが生じます。質問紙調査を例にとりますと、どのような質問を発するかは調査主体がなにを調べたいかによっており、被調査者の思いを必ずしも掬い取るものではありません。いわゆるテレビ局や新聞社が実施している世論調査などに含まれる問題については、のちほどふれたいと思います。心理学には、研究者が社会的現実に含まれるさまざまなノイズを取り除き目下研究の変数間の関係を明らかにするために人為的な疑似的

状況を実験室につくり、そこへ被験者を連れてきて特定の課題をやってもらいその人がどう振る舞うかを観察するという実験室実験という研究方法もあります。生の社会的現実をそのまま研究することはできないために、なんらかの方法でデータ化するという手続きが必要になります。したがって、データというものは、そのような手続きによって作られたもの、すなわち、「再構成された現実」であって現実そのものではないということです(図1)。

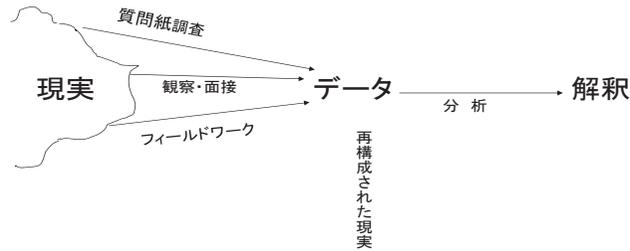


図1 データ採集の手法

ここにいくつかの methodology 上の問題が発生します。まず、研究という営為には、認識主体である研究者がいます。また、認識の対象となる現実世界というものがあります。図1に「データ」とあるのは、一定の手続きで研究者が認識したことを記録したもの、すなわち、フィールドノートとか実験ノート、回収された質問紙などです。この三つに、データを分析して書いた論文を加えた四つが研究という営為を構成することになります。今日は、そのなかでも「データを採る」ということに焦点を置いてお話ししたいと思います。会場の皆さままでデータということばを聞いたことがない人はいないと思いますが、「データって一体何か」ということを突き詰めて考えたことのある方は少ないのではないかと思います。そこで本日は、研究者が「データ」として扱っているものは何かという話をしたいと思います。

## 2. ビデオによるフィールドワーク実習

私は、フィールドワークという研究方法を20年近く教えてきました。そこで、フィールドワークの授業の初めに受講生にやってもらう実習課題を皆さんにもやっていただき、その経験を踏まえたうえで、methodology と method の違いをお話ししたいと思います。講演としては型破りな実習をしていただくことで、データというものが再構築された現実であるということを受容していただけるのではないかと願っています。

まず、フィールドワークでデータを集める場というものは、図2にありますように、人びとがふだん生活している「生活の場」であり、それは一つの社会的現実そのものです。フィールドワーカーは、この生活の場に身を置き、そこにあるモノやそこの人びとの言動を観察し、それを記録します。それがフィールドノーツ、すなわち、データです。

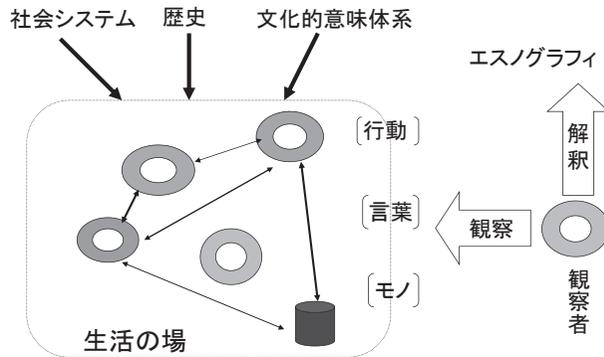


図2 言動・モノが混在しているフィールド

「よく見て、よく聞いて、よく記録する」というのがフィールドワークの基本ですが、その研究方法には、三つの問題点があります。第一に、人びとの生活の場で観察するのですから、観察されていることを人びとが意識して言動を変えてしまうこと (reactivity) が起こるかもしれません。第二に、観察者自身がツールですから、同じ事象を観察していても観察者による差 (observer bias) が出てしまうかもしれません。第三に、人びとの日常生活の場で現在進行形の事象を観察するという事は、もう一度同一事象を観察するという事はない (類似の事象を見ることはあったとしても) という事であり、データの再現性が難しく信頼性 (reliability) の問題が残ります。こうした問題があるにしろ、フィールドワークは、他の研究方法に比べて、人びとが生きている社会的現実のなかでデータを採集するために、データが社会的現実に近いという意味で妥当性の高い研究方法といえます。

これから実習課題をやっていただくのですが、会場の皆さんに外へフィールドワークに出ただけわけにはいきませんので、私が児童公園で撮影したビデオをお見せします。ビデオは無編集ですが、カメラワークによって特定の現実が切り取られているのは致し方ありません。各自が児童公園にフィールドワークについてビデオで見たような情景を観察したとします。子どもたちが公園のスベリ台で遊んでいるというのは、「生の社会的現実」です。人びとが生活しているこのような普通の生活の場面からどうやってデータを採ってくるかということです。

よい観察をするためには、まずリサーチクエスション (以下RQと略記) を立てる必要があります。RQが立ったら、その問いに答えるためには、何を観察するか、どのように観察するかを決める必要があります。仮説検証型の研究では、RQ、すなわち研究の目的をあらかじめ決めてから研究を開始しますが、フィールドワークでは、フィールドに入ってある程度研究対象下の事象を観察してからRQを立てます。まず、第1回目のビデオ視聴では、各自がどのようなRQが立てられそうか考えながら見てください。それから近くの人同士で3名のグループを組んでいただき、各グループで話しあってRQを一つに絞って、何を (what) どのように (how) 観察するかを話しあってください。それから2回目のビデオ視聴を行います。ビデオは45分ありますが、時間の都合で、撮影開始6分から19分くらいの13分間を見ていただきます。それでは、第1回目のビデオ視聴をはじめます。

(ビデオ視聴)

それでは、グループを組んでいただけますか？ まず、グループでRQを決めてください。グループディスカッションの時間は15分くらいで、第2回目視聴のためのwhy, what, howを決めてください。

(各グループをめぐりディスカッションに耳を傾け、適宜アドバイス)

ビデオ視聴②の後、各グループ内で観察結果をまとめるための時間をとる。

サンプルとした観察時間が13分と短いので、まだ結論は出ないと思います。が、今まで見たところまででの観察結果の発表に移ります。すべてのグループに発表していただくと時間がかかりますので、一列でグループずつ、自分たちのグループがどういうRQを立てて、どこを見たらどんなふうに見えたかということをお話してください。

グループ1：私たちは「泣く」という行為に注目しまして、どうして兄弟が泣いたかに注目しました。1回目に見た段階では、「泣く」という行為にしか注目をしていなかったんですが、2回目は「泣く」前の機嫌がよかったときにも注目して、なぜ泣いたかを見ました。そこで見つけたのは、最初はお兄ちゃんが「かまってほしい」ということで手を差し出すんですが、お母さんは手を後ろに組んで応じない。それで弟と遊んでいた。その結果として、お兄ちゃんが泣き出しました。つぎの段階では、お兄ちゃんとお母さんがスベリ台を上ると、下にいた弟が泣き出しました。大体こういう感じです。RQとしては、「何が原因で泣き出したのか？」ということ、「何かを伝えようとして泣き出したのか？」、「誰かに伝えようとしたのか？」ということです。

グループ2：私たちのグループは、お母さんが子どもにどのように対応しているのかという変化の様子に着目して観察してみようということになりました。最初は弟のほうを優先して、泣いているお兄ちゃんをある程度は見守っていたんですけど、取り合いが始まって時間が経つにしたがって、お母さんはお兄ちゃんのほうに配慮して抱っこしていて、弟は背中におんぶしている。どうしてお母さんは兄弟で対応を変えていたのかということをお母さんをお兄ちゃんを考察してはどうか、ということになりました。留学生のお二人は中国籍なんですけれど、日本のお母さんと中国のお母さんとは接し方がかなり違うという発見をしました。どういう点かということ、たとえば子どもが転んでいる、泣いているときに、中国のお母さんはすぐ助けに行く。お母さんだけではなくて、おばあちゃんもお父さんも皆が助けに行く。それから、日本の子どもはどんなに小さな子どもでも、自分の身体よりも大きな荷物を背負って自分で歩こうとしている。中国のお母さんは、まず子どもにそんな大きな荷物を持たせることはないと言って驚いているという話を聞きました。

グループ3：私たちは、最初の大人の介入によって弟の遊びの質、お兄さんの遊びの質がどう変化するかということに注目してビデオを見ていたんですけども、見たあとに話しあったのは、遊びの質そのものはあまり変化していなかったかもしれないということです。最後は「何を見たらいいかわからない」という話になったんですけど、お兄ちゃんの「赤ちゃんがえり」というのがどういう場面で起こるのかとか、最後はお兄ちゃんのほうが砂遊びをするようになったんですね。それはどういうことがお兄ちゃんのなかに生じてあのような行動になったのか、ということをお母さんとお兄さんで考えると面白いかもしれないと考えるようになり

ました。

グループ4：私たちのグループでは、親と子どもの接触の回数と、子どもが泣いた数を数えてみました。まず兄のほうなんですけど、泣いた回数は5〜6回。それに対してお母さんが接触した回数は7回でした。それに対して弟が泣いた回数というのは4〜7回くらい。お母さんのフォローは13回でした。弟をフォローする回数が多いというのは、やはり弟のほうが歳が小さいのでそうしたのではないかと考えました。最初に見たときは、どちらかというとお母さんはお兄ちゃんのほうをフォローしているように見えたんですが、じつさに数を数えてみたら弟のほうを多くフォローしていたというのは驚きでした。

グループ5：私たちのグループでは、最初に見たときには、子どもたちが母親を独り占めする仕草が非常に目立ったので、それについて議論をしていったんですが、議論を深めていったところ最終的なRQとしては母親自身にフォーカスをして、母親は自分の子どもとその周りの子どもたちを含めて、子どもたちが泣かないように公平になるように、いかに調整行動をとっているかということをしることにしました。そうしたところ、母親がとても調整能力が高く、子どもたちに接しているのがわかりました。

### 3. リサーチクエスチョンの重要性

どうも、ご苦労さまでした。5グループから発表していただきましたが、皆さん同じビデオを見ていても、RQによって見えてくる部分が全然違ってくることがおわかりになったことと思います。これはどういうことかということ、現実のなかには無数の情報が埋め込まれているわけですね。そのなかから、RQを立て“Why”“What”“How”を決めることによって、特定の情報が観察者の皆さんの意識のなかに飛び込んでくるということ、したがって、RQが変われば、意識に上ってくる情報は変わってくるということなんです。第1回のビデオ視聴では、RQを立てないで、グループディスカッションもなしで見ましたが、そのときの見え方と、RQを立ててからの見え方は違っていたと思うんです。たとえば、あなたは違うってどう違っていましたか？

学生：最初はいろんなところに焦点がいつているので、あそこもあそこもというかたちでつまみ食いの見方になっていたんですけど、RQを立てて焦点を当てて見ていくと、私たちはお兄ちゃんのほうに焦点を当てていたんですけど、ただ泣いているだけではないし、どのような状況で泣き方が違ってくるのかというのがすごくよくわかりました。

同じビデオを見ていても、RQを立てて見ると採れる情報量が全然違ってくる。そのことを体験していただきました。皆さんが研究対象にする社会事象には、非常にいろんな情報が埋め込まれているのです。それを、ただ一生懸命見ているだけでは、意味あるデータにはならないのです。RQを立てて見ること、すなわち問題意識を明確にしてから社会事象に向きあうことによって、情報量と情報の質が飛躍的によくなるということなんです。的を射たRQを立てるということは、研究の基本です。現実というのはさまざまな相貌を見せるマルチなもの。だけど、特定のRQを立てることによって、それが初めてデータとして浮上してくるということなんです。どのようなRQによって見える世界が決まってくるということなんです。これが構築主義とい

われている考え方です。ただ、今、皆さんに見ていただいたフィルムは第1回目も第2回目もまったく同じものです。それぞれのグループがそれぞれのRQに沿って観察した結果、焦点の当て方によって見えてきたものが違って来た、いろいろな現実が構築されたわけです。13分のフィルムに収められた社会的現象をそのまま分析することはできない。しかし、RQを立てることで無定形のとらえどころのない現実を言語化しフィールドノーツに記載することができ、「現実」は分析可能なものとなります。RQを立てることによって、研究対象下の現実がデータ化される。RQが違えば、今各グループで発表してもらったように、採れてくるデータが違ってくるといことですね。

構築主義に対して、論理実証主義という考え方では、「現実は一つしかない」と考えます。論理実証主義では、初めから仮説があってそれに関係するデータしか採らないのですが、フィールドワークでは、社会的現実を幅広く観察しフィールドノーツに書き留め、ある程度全体像が把握できた段階でRQを立てて焦点観察へ移行します（詳しくは、箕浦、1999）。本日は、フィールドワークという研究手法のなかからRQを立てて焦点観察をする部分だけを皆さんに実習していただきました。無数の情報が埋め込まれている社会的現実からRQに関連するデータを抜いてきて、自分でRQに関連した社会的現実を構築したような感じになります。図1に「データは再構成された現実である」とありますが、それはどういうことか、ご理解いただけたことと思います。

#### 4. Methodologyの根底にある存在論・認識論

ここで、研究という営為に含まれている問題に話を戻したいと思います。「知る」という営為に対するアプローチにはさまざまな様式がありますが、私が文学部哲学科心理学専攻の学生の頃には論理実証主義以外は科学ではないという言われ方をしていました。1960年前後に学部生であった私は、論理実証主義ということも知らず、「科学としての心理学の研究は、〇〇のようにしてやるべし」「研究には仮説が必要である」と教えられ、いわれたとおりの手続きでデータを集めて分析することが研究だと信じていました。そういうやり方では、一面的なデータしか採ることができず、自分の仮説に関係することだけを取り出して、他は全部捨てていたという時代でした。こうした心理学の研究方法に馴染めずに、1970年代前半に留学したカナダの大学院では社会学の修士課程に入りました。そこでの演習の一つに、毎回一つの論文をとりあげ、その研究の基底にはどのような暗黙の前提があるのかをディスカッションする授業がありました。どんな研究にも論文のなかでは語られない暗黙の前提があることに気づかされましたが、それでも、論理実証主義的な研究アプローチから抜け出して、本日お話するような考え方に到達するにはかなりの紆余曲折がありました。本日は、結論部分だけをお話します。

「知」というものに対するアプローチ、「研究」という営為には、必ず認識論と存在論が基底にあります。認識論というのは、現実と研究者のあいだの関係性のことで、客観主義と主観主義という二つの考え方があります。客観主義というのは、研究者の私とは無関係に「真の現実」が独立に存在することを暗黙の前提として、それを研究者は客観的に把握できるという前提で研究します。それに対して、主観主義では、「現実」と称される存在は、客観的与件と主観的活動の協働の所産であると考えます。研究者がどういうクエスチョンをもつか、どういう視点から見るかによって「現実」の見え方が変わってくるという大前提で研究します。先ほどビデオを使った実習で皆さんに体験してもらったことです。どのようなRQを立ててどのような観点からビデオを見るかで、それぞれのグループが描いた児童公園で見た母親や子どもたちの姿（社会的現実）は

違ったかたちで立ち現われてきました。それに対して、客観主義では私という観察者（研究者）とは独立に外界の現実が存在するという前提で研究します。

存在論というのは、研究対象となっている現実世界をどのようなものと措定するかということに関するもので、「客観的実相自体」は存在するのか、存在しないのかをめぐる論議です。「客観的実相自体」はそれ自体として存在するという考えは、「实在論」と呼ばれています。それに対して、対象となる社会的現実というものは、言語によって初めて存在を獲得するという考え方があります。それを「反实在論」と呼んでおきましょう。

このような議論については、ぜひ皆さんに読んでもらいたい本があります。岩波新書の『新哲学入門』（廣松渉，1988）には、科学哲学の基本が書いてあります。この本の第1章「認識するとはどういうことか」には、客観主義と主観主義に関する詳しい論議が展開されていますし、第2章「存在するとはどういうことか」では、实在論や反实在論がどのような哲学的思潮の流れで生まれてきたかが述べられています。今日の私の話もこの本によっています。

表1 存在論・認識論上のpositioningとメタアプローチ

		認識論 (Epistemology)	
		Objectivism	Subjectivism
存在論	实在論	論理実証主義	社会構築主義
	反实在	×	ポストモダンの一部？

表1は、認識論の二つの考えと存在論の二つの考えを組み合わせたものです。客観主義認識論 (objectivism) と实在論が組み合わされるときに、論理実証主義というアプローチが生まれることとなります。認識論上は主観主義の考えをとりながら、対象世界の社会的現実には实在すると考えるのが、一般的に社会構築主義といわれている立場で、私自身は現在この立場で研究しています。フィールドワークという研究方法では、皆さんにも経験していただいたように、多様な情報が埋め込まれている現実のただなかに身を置きデータを採集します。その中から何をデータとして採ってくるかは、研究者がどういうクエスチョンを立てるかによって変わってきます。それが主観主義 (subjectivism) といわれるゆえんです。唯一の客観的現実があるという前提では研究できなくなってしまうのが了解いただけたかと思います。一言ここでお断りしておきたいことは、社会構築主義にもさまざまな立場があるということ、認識論では主観主義に、存在論では实在論に立つというのは、あくまでも私の理解する構築主義です。

大学院生であれば、「データとは何か？」ということ、つまり自分がどういう存在論に立ち、どういう認識論に立ってデータを集めて研究しているかということをも是非とも自覚しておいてほしいと願っています。自覚していない場合は、暗黙のうちに今まで刷り込まれたもので研究することになりますが、そういう場合はほとんどが、論理実証主義的な考え方に立つ研究になると思います。このような研究に向かう暗黙の基本的スタンス、研究のあり方の基底にある認識論と存在論をmethodologyといい、データをどのようにして集めるかという具体的な手続きであるmethodとは区別しています。

解釈的アプローチとか批判的アプローチというのは、ともに構築主義の一流派と考えています。批判的アプローチであるフェミニズムや批判的教育学の立場では、現実が再構成されたものなら、それを作り変えることができる、さらに、作り変える方向に動くべきだと考えます。フェミニズムの流れをくむ研究では、「女というものはかくあるべき」という思い込みの世界に生きていた人も、なぜそのような思い込みの世界に閉じ込められるようになったかを理解できれば、それ以外の見方をすることができるかもしれないと考えます。人びとががんじがらめに思い込みの世界に絡みとられるメカニズムを解明することによって、呪縛を取っ払うことを脱構築といいます。難しく聞こえますが、構築された思い込みから脱することです。思い込みから脱すれば、もっと自由に別の見方や生き方がとれるようになるというのがフェミニズムの思想だと私は思っています。

皆さんが読む文献のなかには、論理実証主義的なもの、構築主義的なもの、そのなかにも解釈的もしくは批判的アプローチに立つものなどがあると思うのですが、どのようなmethodologyに依拠している論文なのかを確認しておく必要があります。これは掲載雑誌によってある程度決まってきます。この雑誌は大体こういう傾向であるという編集方針がわかっていますので、皆さんが論文を国際雑誌に投稿するときは、雑誌の性格に気をつけてください。構築主義の立場が基本的スタンスである雑誌のところに、論理実証主義的な論文を投稿すると第一段階で不採択になる確率が高くなります。どこの雑誌に自分の論文を投稿するかということをじゅうぶん考えてみないといけないですね。おそらく修士一年生の方は、雑誌の性質などということをおかれてもなかなかわかりにくいところがあるかもしれません。しかし、2010年代の今という時代の研究には、論理実証主義と構築主義という大きな流れがあって、構築主義のなかにも解釈的アプローチと批判的アプローチがあるということくらいは知っておいてほしい。

## 5. メタアプローチとしての論理実証主義と構築主義はどう違うか

それでは、三つのアプローチの違いが、研究をするときに具体的にどう関わってくるかということに話を進めたいと思います。時間の都合で表2の批判的アプローチについての説明は省略しますが、それについての説明は拙著(2009)を参照してください。

表2 三つのメタアプローチの比較

	論理実証主義的アプローチ	解釈的アプローチ	批判的アプローチ
研究の目的	行動や社会を律している普遍的な法則の定立。 知見の一般化	特定状況における行動の規則性を理解し共有する。 知見の比較	結果を分析し、不平等をあばき、解放のスタンスを育む
研究の焦点	観察可能な行動に着目。 客観的に「測る」ことに力点	行動や状況に埋め込まれた意味に着目。 「わかる」ことに力点	不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」ことに力点
研究のプロセス	条件統制をしてノイズを除去し、因果関係を把握することが中心。 変数操作が主な研究技法	人と人、人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味を分析し、理解することが中心	隠された権力による統制を明らかにする
研究者のスタンス	客観的であること。 研究対象者とのあいだに距離をとる	調査参加者の居る場に参与。主観的であることを厭わない	研究者は対象から学ぼうとする学習者、かつ批判的意識の覚醒を促す教師
対象者の位置づけ	研究者の指示に従う受動的な存在	研究対象者は能動的な協力者	一緒に学ぶ学習者。研究者にとっての教師
主なデータ収集法	数量的データを得るための実験や調査	質的データを得るためのフィールドワーク	質的、量的どちらのデータでもかまわない

出典：LeCompte & Preissle, 1993, pp. 24-25 をもとに箕浦が改変

研究のフォーカスは、論理実証主義と解釈的アプローチではどのように違ってくるのでしょうか？ 論理実証主義の人にとっては客観的であるということが重要になってきますから、研究対象の事象を「測り」、数量化したデータを統計的に分析することに熱心です。数量化することで主観を排除することができるという信念をもっていますので、測れないような事象は研究対象としない傾向があります。自尊心尺度とか5件法による態度の測定といった例がその典型で、質問紙調査はそういったさまざまな測度で構成されています。それに対して解釈的アプローチというのは、状況に埋め込まれた意味に着目する、つまり「わかる」ということを重視します。皆さんが実習でビデオを見たときは、お兄ちゃんがスベリ台の上で一人で上がって行ったものの一人で滑り降りることに不安を感じている様子とか、弟にお母さんを取られたときの悔しい気持ちとか、音声情報のないビデオでしたけれど、目に見えた情景からだけでもビデオの登場人物の気持ちをわかろうとしたと思います。フィールドワークで何も道具を使わず、つまりあなた方自身が観察の道具となって観察したことをフィールドノーツに書き留めます。それが分析の対象となるデータですが、フィールドの人びとがどのような気持ちでどんな振る舞いをしているのか、言語化されていない状況もデータとして記録されます。論理実証主義が「測る」ことを中心にしているのに対して、解釈的アプローチは「わかる」ことに焦点をあてた研究方法といえます。

研究の目的も、三つのアプローチで違います。論理実証主義アプローチでは、研究の目的は、人間行動を律している普遍的な法則を見つけ出すことです。私の学生時代、心理学入門の最初の授業で「心理学というものは、人間行動についての一般法則を見つけることです。科学的方法を使ってそれを見つけます」というようなことを教え込まれたことがあります。つまり、人間という種に共通の行動法則があることを暗黙の前提にしていました。論理実証主義では、たとえば、立教の学生を調査協力者とした実験で見つかった法則は、全人類にも該当するという大前提で研究します。それに対して、解釈的アプローチというのは、特定の状況における人間行動の規則性についての理解の共有をめざしますが、全人類に適用できる行動法則という前提がありません。Aというフィールドで見つかった知見と、Bというフィールドで見つかった知見を比較する。先ほど、留学生の方がビデオで見た日本の母親と中国の母親はずいぶん違うという感想をもたれたというグループ報告がありましたが、中国のお母さんと子どもがどういうインタラクションをしているかをフィールドワークで明らかにして、日本でも同様のフィールドワークをして、二つのフィールドワークから得られた知見を比較して、日本と中国の母子相互作用について論じることはできます。しかし、全世界のお母さんは幼児に対して〇〇のように行動している、人類一般に適用できる母子相互作用の行動原則があるという前提がないわけです。それぞれの状況によってそれぞれの行動がある、すなわち、文脈 (contexts) と行動との絡み合いを理解することが重要であるという立場に立っています。

したがって、研究のプロセスも違ってきます。論理実証主義の人たちは研究対象となっている変数間の関係性を把握して因果関係を見つけ出すことが目的ですから、関係性を不明確にするようなノイズを一生懸命除去するような実験手続きを考案します。実験室に人を連れてきて人為的な状況 (同じような条件下で実験するために条件を統制する) に被験者をおいて、観察下の変数を操作しそれが人の行動をどのように変えるかを観察します。実験室で自分が狙った変数にのみ目を凝らしているような感じになります。解釈的アプローチでは、因果関係を抽出することは目的ではありません。人びとが生活している生活の場に入っていく、そこで展開している社会的相互作用や伝達されている意味を分析します。観察下の人びとが生活している意味世界を知ることによって、人間を理解しようとしています。

研究者のスタンスと対象者との関係のとり方も論理実証主義と構築主義では違っています。論理実証主義の場合は、研究者は客観的であることを標榜して、研究対象者とのあいだに距離をとり、研究者の指示に従って動いてもらうことを期待します。指示どおりにやらなかった場合のデータは、実験操作がうまくいかなかったということで分析対象から外すということになります。今は研究協力者と呼ばれていますが、私が心理学専攻の学生であった頃は被験者と呼ばれ、研究者の指示に従う受動的な人という位置づけでした。解釈的アプローチでは、研究者と研究参加者は同じ場を共有しますので、自分の意味世界を開示してくれる能動的な協力者になってもらう必要があります。研究対象者の生活世界に入っていきますので、距離を置いた客観的な存在とはならないわけです。言い換えれば、主観的になることを厭わないといえるでしょう。

以上の説明で、論理実証主義アプローチと解釈的アプローチでは、研究という営為の営み方自体が基本的に違うことを理解していただけたかと思うのですが、こういうことをmethodologyといいます。皆さんが、修士論文や博士論文研究をする際には、研究テーマやRQを攻略するのに適切なmethodologyを意識的に選択し、その利点と欠点をはっきり自覚していることが肝要です。

## 6. 構築主義的インタビューの構造

今までは観察ということを中心に話してきましたが、「インタビュー」という手法には、methodology上どういふ問題があるのでしょうか。インタビューでは、相手が語ったことが分析の対象となります。しかし、語ったことは、語り手が考えていたことそのものかというところではないんですね。言わんとすることがあっても、「こういうことを言ったらまずいのじゃないか」という社会文化的・無意識的な抑制が働き、「生のままの思い」もじっさいに話すときには違った語り(narrative)になります。日常会話においても、話者は自分の思っていることを全部話しているわけではなく、一部は話者の心のなかに沈潜したまま表出されないということはよく経験することですが、インタビューという研究方法でも同じことが起こっています。それからもう一点考慮すべきことは、語られる内容は、使用言語のルールや語り口、語り手の言語能力によっても影響を受けるということです。日本語が第二言語である人とインタビューする場合、母語では言えても日本語では表現しにくい部分は語られません。また、子どもが語り手の場合は、発達のレベルによって語りの内容も量も変わってきますし、言語能力の発達がテーマの場合は、そういうこと自体がデータとなります。論理実証主義の立場では、「語られたこと」が「言わんとすること」とイコールにみなされがちです。インタビューイーが住んでいる意味世界を理解することをめざす解釈的アプローチでは、「語り」やその時の状況その他から、その人の言いたかったことは何かを推定しようと努力します。語りを文字化することで可視化された社会的現実だけがデータではなく、それに対する語り手の感情や態度をもデータとして採るといことが、解釈的なインタビュー研究といえます。

インタビューイーをめぐる状況以外にインタビューアーである研究者自身に関しても、考慮すべきことがあります。研究者である私は相手が語ったことを正しく理解しているかどうかにも、またズレが生じます。聞き手が相手の語りを理解するときにも、聞き手が育った社会文化的なものや無意識的なものによって条件づけられた状態で話し手の語りを聞いています。このことに関する私の経験をお話しましょう。私はこの4年間ほどIJEPA (Indonesia-Japan Economic Partnership Agreement) のプログラムで来日したインドネシア人介護福祉士・看護師候補者の

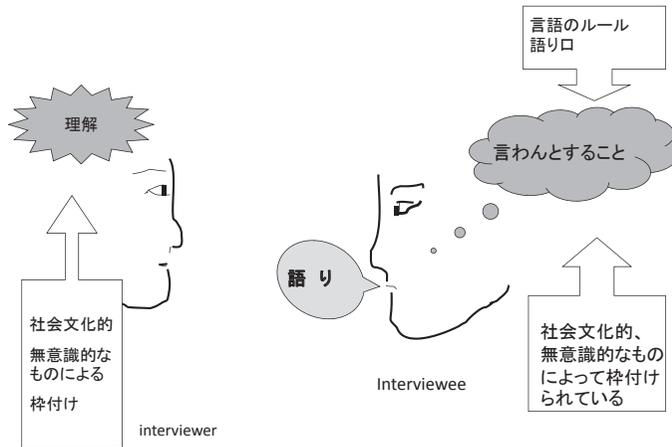


図3 構築主義的インタビューの構造

多くの方から日本での異文化体験を聞いてまわっております。その一環でインドネシア現地の病院や保健所、看護学校を訪ねました。そこで、現地調査前に私がインドネシア人の方の話を自分なりに理解したと思っていたことと、自分がインドネシアに行って現地の事情を知ったあとのインタビューでは、理解の度合いがまるで違うことを実感しました。現地調査前のインタビューのテープを聞いても、インドネシアに調査旅行に行った前とあとでは、私の理解の仕方がものすごく違っていました。現地調査前は、日本での経験から作られた認識枠組みで、相手の話を理解していたことを悟りました。ですから、インタビューで得た「語り」を解釈するときは、言いたいことがそのまま「語り」になるのではなくて、もろもろの制約を受けて「語り」が出てくること、また、その語りの聞き手の枠組みによっても「語り」の理解は影響を受けることに留意する必要があります。話し手と聞き手側の要因によって二重の制約を受けたデータ、すなわち再構成されたデータを分析の対象としているという自覚が必要だということです。

では、構築主義的なりサーチインタビューにおいて何に気をつけなければいけないのでしょうか？ インタビューで語られたことは、語り手の過去の経験ですね。それは、今の話し手の現実ではない。聞き手もまた、話し手の回想内容へのアクセスがないので、話し手の語りに頼らざるをえない。しかし、語りの理解は、聞き手の枠組みによって制約を受けたかたちでしか理解されない、そういう構造になっているわけです。ですから、聞き手は語られることばから「私の理解」を構成する。それはあくまで近似的な理解でしかないし、時には誤解が起こることもあるということです。

## 7. 質問紙調査は現実を把握しうるか？

上記のことは、どのようなデータについてもいえることです。質問紙調査で世論の現実を把握することができるのでしょうか？ 表3は、「池上彰の新聞ななめ読み」（朝日新聞、2014年5月30日掲載）でとりあげられていたマスコミ各社が実施した集団的自衛権をめぐる世論調査の結果です。朝日新聞や毎日新聞、日経新聞とテレビ東京の共同調査では「集団的自衛権を行使することに賛成か、反対か」という二択で聞いていますが、読売新聞では三択で聞いています。どういふ三択かという「全面的に使えるようにすべきである」「必要最小限度の範囲で使えるよう

表3 集団的自衛権の行使をめぐる世論調査結果

---

● 2 択 集団的自衛権を行使できるようにすることに	
朝日：賛成 39%	反対 55%
毎日：賛成 39%	反対 54%
日経：賛成 28%	反対 51%
● 3 択 (読売)	
「全面的に使えるようにすべきだ」	8%
「必要最小限の範囲で使えるようにすべき」	63%
「使えるようにする必要はない」	25%
● 3 択 (NHK)	
「行使できるようにすべきだ」	30%
「行使できるようにすべきではない」	23%
「どちらともいえない」	37%

---

質問の仕方では回答が変わってくるのが質問紙調査。

にすべきである」「使えるようにする必要はない」です。また同じ三択でも、NHKは「行使できるようにすべきだ」「行使できるようにすべきではない」「どちらともいえない」というように聞き方が違います。表3は、一見客観的に被調査者の意向を反映しているようにみえる質問紙調査でも、質問の仕方や選択肢の構成の仕方では回答がガラリと変わってくることを示しています。こうした世論調査を新聞社側がどのような記事として紙上で報道しているのでしょうか？ 読売は「全面的に使えるようにすべきである」と「必要最小限度の範囲で使えるようにすべきである」を合算して「集団的自衛権 71%容認」という大見出しと、〈本誌世論調査「限定」支持は63%〉という小見出しを付けて結果を報じています。朝日や毎日、両方とも賛成39%で、「行使に反対する」が55%（朝日）と54%（毎日）。日経は、賛成28%、反対51%と報じています。同時期に実施された日本国民を対象にした調査でも質問の仕方や選択肢の作り方で、「世論」という社会的現実の構成のされ方が変わってくることを示しています。世論調査をしたからといって「民意」を客観的に把握したことにはならないということですね。日本人の民意がどこにあるのか、社会的現実にはわからないわけです。報道された「民意の現実」なるものは、どのようにして現実を把握したか、それをどのように表現するかという2側面で「再構成された現実」を紙面で報道していることを示しています。

皆さんが研究に従事する場合も同じ問題がついてまわります。データをどのようにして得るか、分析した結果を論文にどう書くかということと世論調査とその報道は、相似形の問題を含んでいます。世論調査では、質問の仕方によって、民意という現実を再構成しているといえるでしょう。構築主義の立場からいうと、質問によって現実の構成のされ方が変わってくるということですね。「データは再構成された現実である」ということは研究には必ず随伴することですので、どのよ

うにしてデータを得たかという研究方法を明示することが肝要ということになります。

ここで話は最初に戻るのですが、図1のデータの産出ということは、「現実を再構成する」ということなんです。どういう問いを発して、どういうデータの集め方をするかによって、データの中身は変わってくるのです。現実をそのまま反映した「純粹に客観的なデータ」というのはありえない。これはドキュメンタリーでも同じことです。基本的にはなんらかのフレームで切り取って編集し、そこに作り手の主観的なものが入ってきます。先ほど見たビデオにしても、皆さんのRQによって切り取ってくるデータが違ってくるわけですよ。つまり「現実=データ」ではない。客観的な現実というのはいないというのが私の立場です。それゆえに、作り手がどう関わって「現実」を再構成したのかということをきっちり書きましようというのが、研究の一つの約束事になります。文化人類学でも、フィールドワーカーがどう現実に関わってこのようなエスノグラフィーを生み出したかを書くことこそが重要といわれるようになりました。

皆さんが、研究者としてデータを扱う際に、それがどういうものであるのかということも少しも理解していただければということで、今日はお話させていただきました。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。

#### 引用文献

池上彰 (2014.5.30). 「池上彰の新聞ななめ読み」『朝日新聞』2014年5月30日

廣松渉 (1988). 『新哲学入門』岩波新書.

箕浦康子 (1999). 『フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房.

箕浦康子 (2009). 『フィールドワークの技法と実際Ⅱ：分析・解釈編』ミネルヴァ書房.